

## 形成外科の雑誌の読み方

久徳 茂雄

## I. はじめに

本邦での形成外科の歴史は40年余りで、まだ真の意味での臨床領域の地位を確保したとは言えない。医療関係者においても依然不案内や知識不足は否めず、各病院における有能な形成外科医の配置と図書室における必要十分な形成外科関係の教科書、雑誌の所蔵が望まれる。2001年出版指標年報<sup>1)</sup>によると、2000年度の医歯薬学関係雑誌の発行部数は1,345万冊におよび、2000年9月現在での医学中央雑誌収載誌数は2,277誌である。この中での形成外科関係誌は極めて少なく、関連学会雑誌を含めても2%にも満たない。

形成外科とは、対象を体表を中心とする全身とし、先天異常、外傷、腫瘍などによる形態の変化・損傷・欠損の機能的、整容的再建を外科的に行うもので、社会に個人を適応させることを目的とする。対象疾患は多岐にわたり、診療各科との境界領域も多く、外科系各科との共同手術も行われている(表1は国内の関連学会・研究会の一覧である)。本稿では、臨床医の立場で、投稿し、読んできた雑誌のいくらかを紹介する。

## II. 投稿する雑誌

初めての論文が活字となった時の感動は、初執刀の手術のように、誰しも忘れない。臨床活動の合間に参考文献を読みあさり、指導医の校閲、編集委員会での査読、訂正を経ての掲載決

表1. 形成外科関連学会・研究会(国内)

日本形成外科学会	創傷治療研究会
日本形成外科学会地方会	日本褥創学会
日本熱傷学会	日本コンピューター支援外科学会
日本熱傷学会地方会	形成外科内視鏡手術研究会
日本頭蓋顎顔面外科学会	日本バイオマテリアル学会
日本口蓋裂学会	日本乳癌学会
日本救急医学会	日本小児神経外科学会
日本マイクロサージャリー学会	日本レーザー医学会
日本手の外科学会	義眼床手術研究会
日本先天異常学会	日本クリティカルバス学会
日本美容外科学会	日本外傷学会
日本災害医学会	防衛衛生学会
日本頭頸部腫瘍学会	日本臨床皮膚外科学会
日本外科系連合学会	日本皮膚悪性腫瘍学会
日本頭蓋底外科学会	日本顎変形症学会 など

定通知は生みの苦しみを一気に解消してくれる。外科医にとって手術に熟練することは最も必要なことであるが、経験した手術手技やそれから得た新知見を発表するのも各人のステップアップの証しとして、また専門の情報源として重要となる。

一般に国内医学雑誌の種類は学会誌、商業誌、紀要などの地方誌に大別され、内容は総説、症例報告、手術法、臨床統計、実験、アイデア、留学記などがある。投稿論文のすべてが掲載されるわけではなく、多くの読者を持つ、高水準の雑誌ほど受理されにくく、論文にふさわしい雑誌を選択すべきである。多重投稿は問題外であるが、学会発表後などに、雑誌編集部から既に掲載済みの論文に対して原稿依頼をもらうことがある。日本では著作権は欧米ほど厳格ではないが、この場合、一度発表した症例写真やデータ・表などは原則的に出版元の許可なしに

きゅうとく しげお: 市立岸和田市民病院 形成外科部長  
kyutoku@takii.kmu.ac.jp

は使えないので注意を要する。特にいったんあるテーマで邦文論文を書いたら、これを英文で書き直すことはまず不可能と考えるべきである。

医学論文には一定の様式があり、表現、用語、データ、統計処理などの事項に留意し、明解な論旨で記述したい。情報を与えるキーワードの選択も重要である。特に形成外科臨床論文では、インパクトのあるきれいな写真がものをいう。写真の不揃い、組み写真の不統一、トリミングの不備、ピンぼけなどは避けるべきである。患者のプライバシー保護も配慮すべきで、人を対象とする臨床実験の場合はその方法が合法的であること—ヘルシンキ宣言(1975)の倫理規定に沿うか—も明記すべきである。英文論文では着想と結果、priority がより重要で、情熱をもって独創的に記述すべきで、はじめから英文で書くとよい。形成外科の術式などはユニークに命名するのもアピールになる。書いていて煮詰まってきたら、数日間放置して読み返すと自分の文章が客観的に読める。

### Ⅲ. 形成外科関係の雑誌

医療のコンピュータ化が進み、外科一般は手術自体が非侵襲的、ロボット化、縮小傾向にあるなか、再建外科は逆行するかのようになり、他人の手の移植や、拡大的切除を可能にするマイクロサージャリーなどが行われ、広範囲熱傷には超早期に積極的に allograft を行うのが当然の時代になった。頭蓋顔面外科では胎児手術が臨床応用されたほか、骨を引っ張り鉛のように延ばす骨延長法が一般病院でも行われるようになってきた。最近では tissue engineering による臓器再建の臨床が始まっている。形成外科臨床は多方面で変化しており、常に新しい情報の入手が必要である。

#### 1. 国内の雑誌

日本形成外科学会の発足は1958年であるが、同時に機関誌として発刊された「形成外科」は31巻目より月刊化されており、1981年の「日本

形成外科学会誌」の発刊以降も、一般誌として広く読まれている(唯一の商業誌)。学会誌が学会関係の広報、地方会などの会議録掲載や博士論文の発表の場であるのに対し、雑誌「形成外科」はより臨床論文が多く、学会でのシンポジウムなどが特集として取り上げられている。また、関連外国文献抄訳を一年遅れで付している。年2回程、形成外科の基本手技や美容外科などの増刊号を発行しており、形成外科医以外にも読まれている。こうした特集号は関連外科系商業誌にも「〇〇医に必要な形成外科の知識」などというテーマでときどきみられ、再建外科、形成外科の啓蒙、最近のトピックなどが紹介されている。専門外や研修医などには読みやすい。

「日本頭蓋顎顔面外科学会誌」は1983年に日本顎顔面外科学会として創立され、翌年より「日本顎顔面外科学会誌」として年1回発刊されていたが、2年後の日本頭蓋顎顔面外科学会への改称に伴って同名に改変された。投稿論文の増加により昨年からは年3号となっている。内容は欧米の頭蓋顎顔面外科学会と異なり、頭蓋顎顔面硬組織のみにこだわらず、耳や鼻の再建、唇裂や顔面の皮膚腫瘍なども論じられている。投稿論文のほとんどは形成外科からのものである。

「日本マイクロサージャリー学会誌」は1974年からの同名の研究会に変わって、1987年の日本マイクロサージャリー学会の発足に伴い発刊された。当時は年2回の発行が現在では年4号となっており、遊離組織移植、血管吻合、筋・筋膜皮弁、四肢再建などに関する論文を掲載している。「日本手の外科学会誌」と同様、整形外科と形成外科が参加している。

「熱傷」は25年の歴史を持つ日本熱傷学会の機関誌であり、1976年創刊である。形成外科、救急診療科からの論文に加えて、看護部などパラメディカルからの報告も載る。「日本口蓋裂学会誌」は1976年発足の同名学会機関誌であり、学会抄録号を入れて年5冊発刊される。形成外

科、歯科口腔外科、矯正歯科、言語療法などからの投稿がある。欧米の同様の学会誌と比して、唇裂手術に関する論文が少ない。

「Congenital Anomalies」は日本先天異常学会（1961年発足）の機関誌で、すべて英文論文からなる。形成外科以外に解剖学の論文が多い。「Skin Cancer」は日本皮膚悪性腫瘍学会（1986年発足）の会誌で、皮膚外科からの投稿がほとんどであり、形成外科医にはプラクティカルな雑誌である。

## 2. 海外の雑誌

最も権威あるとされる「Plastic and Reconstructive Surgery」(PRS)は、昨年創立70周年を迎えた米国形成外科学会の機関誌であり、年間2巻、各7冊発行される。世界中からの多くの投稿があり、半数以上は受理されず、掲載までに1年弱を要する。編集は500名近い専門分野からの審査員によって行われ、Discussionではポイントをついた批評なども興味深い。多くの歴史的文献を生んでおり、最近はaesthetic surgeryの論文の割合が増えている。

同様に形成外科全般について、「Annals of Plastic Surgery」(1962)、「British Journal of Plastic Surgery」(1948)、「European Journal of Plastic Surgery」(1978)などが知られるが、それぞれに臨床症例・手術手技・実験などの特色、割合に差がある。

「Scandinavian Journal of Plastic and Reconstructive Surgery and Hand Surgery」(1967)は、約10年前から日本形成外科学会の official journal となっている。これらは PRS に比べ、発行部数が年間4～6冊と少ない。マイクロサージャリー関係の雑誌は、「Microsurgery」(1980)、「Journal of Reconstructive Microsurgery」(1985)などがあり、頭蓋顔面外科関係では「Cleft Palate-Craniofacial Journal」(1964)、「Journal of Craniofacial Surgery」(1990)など、熱傷は、国際熱傷学会機関誌の「Burns」(1975)がある。「Skull Base Surgery」(1991)は国際頭蓋底学会をはじめ欧州、北米

および日本頭蓋底外科学会の official journal でもある。英文誌では珍しく脳外科、耳鼻科、形成外科からの論文が混じる。

これらの雑誌と違って、総論的でより教育的なものとして、「Selected Readings of Plastic Surgery (SRPS)」(Selected Readings of Plastic Surgery, Inc.)、「Clinics in Plastic Surgery」(W.B.SAUNDERS)、「Year Book of Plastic, Reconstructive and Aesthetic Surgery」(Mosby-Year Book)を挙げる。前2者は形成外科の各領域別の論文集であり、「SRPS」が、トピック別のオーバービューを付加した歴史的および重要論文選集であるのに対し、「Clinics」は、専門領域別の著者による最新総説論文集であり、いずれも3～5年で一巡する。レジデントにはぜひ推薦したい。「Year Book」は形成外科の注目すべき論文を1～2年遅れでまとめたものであるが、絶対論文数がやや少ない。

## 3. Impact factor (文献引用影響率)について

医師各人の論文業績評価のために、一般的に掲載雑誌の客観的な評価法として Science Citation Institute (SCI) が発表する指標、impact factor が用いられている。ある雑誌が過去2年間に掲載した論文の総被引用回数を、過去2年間の総論文数で除したもので、その雑誌の「平均的論文」の引用頻度をはかるものである(表2)。

## IV. 雑誌の読み方

雑誌の読み方には読むべきテーマを検索する場合と、新着雑誌の内容をチェックする場合があり、研修医と専門医の立場でも異なる。文献検索もインターネットなど情報網の発達した現在では、知りたい情報は直ちに入手できるようになった。前述の英文誌の中にはホームページから検索が自由にできるものも多く、オンラインジャーナルに加入するとデータベース化した要旨を机上でダウンロードできる雑誌もある。

一方、最新の知識の補充には、各種新着誌のチェックが必要で、臨床活動の合間に図書館に

表 2 . 形成外科関係英文誌の impact factor

Journal Abbreviation	ISSN	1999 Total Cites	Impact Factor	Immed. Index	1999 Articles	Cited Half-Life
ANN PLAST SURG	0148-7043	2487	0.702	0.066	226	7.4
AESTHET PLASTIC SURG	0364-216X	636	0.516	0.101	79	7.1
BRIT J ORAL MAX SURG	0266-4356	1002	0.758	0.26	73	7.6
BRIT J PLAST SURG	0007-1226	2426	0.826	0.143	126	>10.0
BURNS	0305-4179	1134	0.636	0.097	124	6.3
CLEFT PALATE-CRAN J	1055-6656	1445	0.994	0.119	67	9.6
CLIN PLAST SURG	0094-1298	1309	0.981	0.048	63	8.9
DERMATOL SURG	1076-0512	1434	2.279	0.39	195	2.7
EUR J PLAST SURG	0930-343X	137	0.193	0	83	5.2
INJURY	0020-1383	1430	0.261	0.054	148	7.8
INT J ORAL MAX SURG	0901-5027	1525	0.948	0.16	94	8.4
J CRANIO MAXILL SURG	1010-5182	544	0.704	0	41	6.7
J CRANIOFAC SURG	1049-2275	517	0.845	0.181	72	4.3
J HAND SURG-AM	0363-5023	2674	0.706	0.095	179	8.6
J RECONSTR MICROSURG	0743-684X	554	0.494	0.035	85	6.6
J TRAUMA	1079-6061	10752	1.752	0.191	413	7.8
MICROSURG	0738-1085	751	0.233	0.046	65	6.4
PLAST RECONSTR SURG	0032-1052	11141	1.482	0.237	515	9.7
SCAND J PLAST RECONS	0284-4311	927	0.565	0.09	67	>10.0
SKULL BASE SURG	1052-1453	170	0.347	0	43	5.6

(米国ISI社 1999年 Journal Citation Reports (Copyright 2000) による医薬系雑誌 Impact Factor 情報より)

通い、必要な論文等は抄読会用やファイリングのためにコピーをとっておくべきである。専門医となれば、新しい手術法の検討、より専門的な知識の補充、教育などの目的で、研修医は手術手技の確認、基礎知識の拡充などの目的で新着雑誌の書架の前に立つ。論文の氾濫した時代にあっては、数少ないかもしれない良い論文を新着雑誌の中から見つけるとほっとする。そして、今はほとんど無くなったが、図書館のひんやりとした書庫で、MEDLINE 検索のメモ書きを手に、黄色いページをさがしながら、脱線して古い論文をあちこち読みふけてしまい半日を潰すことも楽しいものだ。

## V. おわりに

インターネット全盛時代の今、情報の流通は

即時化され、手に入りたい情報は取捨選択に困るほど溢れかえっている。原著論文としての質は雑誌が多くなるほど疑わしいかもしれない。恩師である故田嶋定夫教授に、「外科医として10年に一度大きな仕事をしなさい」と励まされたことがあった。確かに彼は10年ごとに世界的に有名な手術術式を開発、報告されていた。最近のなんでもかんでも学会発表、論文、という風潮や、活字の盲目的信用は避けるべきである。論文を書くなら、他人と違うアイデアや考察を持っていたいし、同好の士に引用、ファイルしてもらおうような報告を残したい。

## 参考文献

- 1) 出版指標年報；2001年版．東京：全国出版協会出版科学研究所；2001.